

★ 収束的妥当性(convergent validity)と弁別的妥当性(discriminant validity) ★

M.Kishi

池田央 1973 心理学研究法8 テストⅡ 東京大学出版会 p.192より

- 1 構成概念妥当性として分類される妥当性の検討方法である。
- 2 複数の特性について複数の方法で測定されてた結果が存在する場合に適用される。

3 考え方

3つの異なる特性A, B, C(たとえば語彙力・読解力・文法力)について2つの方法で測定した結果(たとえば多枝選択法と完成法)があるとする。全部で6種類のdata(得点)が得られるはずである。

それら6種類の得点すべての中で相関係数(r)を求める。その結果を下表のようにまとめる(I ~ IVには相関係数が入る)。

特性		方法1			方法2		
		A1	B1	C1	A2	B2	C2
方法1	A1	I	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ
	B1		I	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅳ
	C1			I	Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ
方法2	A2				I	Ⅲ	Ⅲ
	B2					I	Ⅲ
	C2						I

- I ⇒ 同じ特性を同じ方法で測定した場合である。2回測定すれば再テスト法の信頼性係数に相当する。
- Ⅱ ⇒ 同一特性を異なる方法によって測定した場合である。この値は高くならなければいけない。この値が高ければ、【収束的妥当性】がみられたという。さらに重要な点は、Ⅱの値(特性内相関)がⅢの値(特性間相関)よりも高いことが必須条件である。
- Ⅲ ⇒ 異なる特性を同じ方法によって測定した場合である。
- Ⅳ ⇒ 異なる特性を異なる方法によって測定した場合である。Ⅳの値は、他のI, Ⅱ, Ⅲよりも小さくなければならない。小さかった場合、【弁別的妥当性】がみられたという。